慈恵医大誌 2014；129：119-27

【資　料】

ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育の評価

久保善子[1]　嶋澤順子[1]　北　素子[2]
高島尚美[3]　高橋　衣[4]　佐竹澄子[5]
濱中喜代[4]　櫻井美代子[6]

[1] 東京慈恵会医科大学医学部看護学科地域看護学
[2] 東京慈恵会医科大学医学部看護学科在宅看護学
[3] 東京慈恵会医科大学医学部看護学科成人看護学
[4] 東京慈恵会医科大学医学部看護学科小児看護学
[5] 東京慈恵会医科大学医学部看護学科基礎看護学
[6] 東京慈恵会医科大学医学部看護学科老年看護学

（受付　平成26年2月13日）

Ⅰ．緒　　言

東京慈恵会医科大学医学部看護学科（以下，本学科）では，教育理念として資質の高い看護実践能力の育成に重点をおいており，この理念達成のため，学生が主体的学習態度を獲得することを促す教育の実施を重視している．かねてから，看護学科カリキュラムでは，「人を看る」という大学創設者の理念をベースとして，1年生から4年生までに段階的に看護専門職としての学びを統合するための看護総合演習が配置されてきた．平成24年度のカリキュラム改正の際に，さらにそれを評価修正し，看護総合演習Ⅰ～Ⅳを各学年30時間（1単位）で配置した．そして，演習では，学生それぞれの看護職としての将来像や学びへの関心を具体化しながら「自分をみる･他者をみる」「看護の対象をみる」等を段階的に学習することを計画した．また，平成21年度以来，4年間を通してポートフォリオを活用している．ポートフォリオとは，自分の意志で獲得した情報や自分の変化，成果を一つに集めてまとめたファイルをいう．学習過程で作成したさまざまなものを収集，選択し，自分の描いた目標（ゴール）やこうなりたいという将来像（ビジョン）に照らし合わせて自己評価することにより，主体的な学びを実践していくためのツールである[1)2)]．そこで，演習とポートフォリオが有機的に機能することで，学生の主体的な学びが促進できると考え，看護総合演習Ⅰ～Ⅳにおいて，ポートフォリオの活用を具体的に位置づけることにした．さらに，教育評価として学生の主体的学習態度の獲得過程を明らかにする必要があると考え，導入となった平成24年度看護総合演習Ⅰから学生の主体性の一側面を測定できる客観的評価尺度と科目の学習目標達成度を用いた教育評価を開始した．先行研究において，主体的学習態度を育む教育に関する研究は，小中学校児童生徒を対象に客観的評価方法を追求するもの[3)4)]，看護学生を対象に教員の関わり方や主体性の実態を明らかにしたもの[5)]等が報告されているが，ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得に関する学習効果を明らかにした研究はない．そのため，本研究の取り組みは，学生が主体的学習態度を獲得するための教育のあり方を検討するための貴重な資料になることが期待される．

本研究の目的は，ポートフォリオを用いて実施する看護総合演習Ⅰの学習効果を明らかにすることであり，その結果を基に，学生が主体的学習態度を獲得するための教育のあり方を検討すること

である．なお，本研究において主体的学習態度とは，看護専門職になる者としての自分自身のあり様を自覚し，ビジョンとゴールの設定を通して，自己の可能性や次なる目標を見出すこととする．

Ⅱ．看護総合演習Ⅰ～Ⅳの概要

看護総合演習Ⅰ～Ⅳは，各学年に30時間（1単位）で配当されている科目である（Fig. 1）．1年生で実施する看護総合演習Ⅰの教育目標は，(1) 学生自身が看護職になる者としての将来像や学びへの関心を具体化することを通して，「自分をみる」こと，「他者をみる」ことを学ぶ．(2) 今後大学で学んでいくために必要とされるアカデミックスキルを習得する．(3) (1) (2) の目標を達成していく過程を通して，学生は主体的な学びの姿勢を身につけることを学ぶ，である．平成24年度の演習プログラムは，Table 1の通りであり，学生は将来像や学びへの関心をグループ間で共有し，グループで決定したテーマに沿って調べ学習を行った．調べた内容をグループでまとめ，発表会で報告・討議した．これら一連の流れを通して，学習活動の基盤となるアカデミックスキルの習得，主体的学習態度に関連するコミュニケーション力や意見表明力等の獲得を目指した．グループメンバーは，6～7人であり，1グループに1人担当教員が配置された．ビジョンとゴールの設定は，グループ活動を終えた後に実施し，学生はグループの担当教員と共にその内容を確認した．

ついで，2年生で実施する看護総合演習Ⅱでは，「看護の対象をみる」ことをテーマに，看護の対象をみる能力を深めるために，看護活動に必要な主要概念を問題解決思考（Problem Based Learning, PBL）により理解する．3年生で実施する看護総合演習Ⅲでは，「看護技術（わざ）をみる」をテーマに看護過程の演習と客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination, OSCE）を行う．4年生で実施する看護総合演習Ⅳでは，「看護の役割をみる」ことをテーマとし，チーム医療における看護の役割をみる．そして，全学年の演習を通して，ポートフォリオの活用を行う．

Ⅲ．方　　法

1．対象者

平成24年度に実施した看護総合演習Ⅰの履修前後の本学科1年生・42人と看護総合演習においてポートフォリオの活用を位置づけていない2～

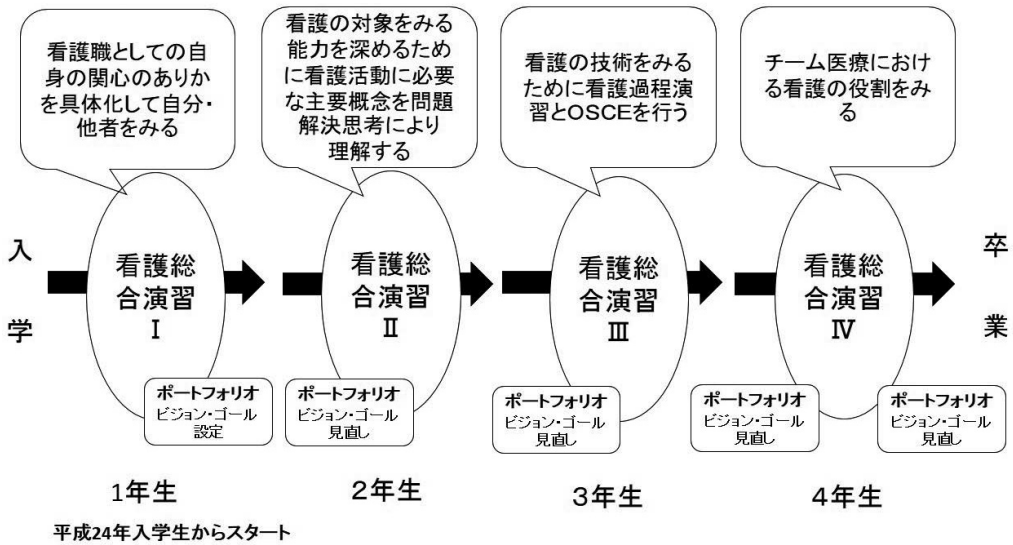

Fig. 1. 看護総合演習Ⅰ～Ⅳの概要

Table 1.　平成24年度看護総合演習Ⅰの授業内容

回数	授業内容
1	シンポジウム 導入
2	・大学で学ぶということ ・科目の目標と概要、方法 ・ポートフォリオの説明 グループ活動①（グループメンバーを知る）
3	講義：アカデミックスキルの習得①ディスカッションとグループワークの方法 グループ活動②（方向性決定） (看護職になる者としての将来像や学びへの関心を具体化することを通して「自分をみる」こと，仲間である「他者をみる」ことを考察するための活動) ・グループワークの振り返り
4	講義：アカデミックスキルの習得②調べる－文献検索の目的と方法 グループ活動③（計画立案）
5	グループ活動④（実施）
6	グループ活動⑤（実施）
7	グループ活動⑥（実施）
8	グループ活動⑦（実施）
9	講義：アカデミックスキルの習得③プレゼンテーションの目的と方法 グループ活動⑧（実施）
10	発表準備
11	発表（「看護職となる者としての将来像や学びへの関心を具体化することを通して、「自分をみる」こと，仲間である「他者をみる」ことを考察する」ために行った活動から学んだことを発表する）
12	発表
13	講義：アカデミックスキルの習得④レポートの書き方 ポートフォリオの目標書き出しシートおよび美じぃんシートの記載確認
14	個別面接：ポートフォリオの目標書き出しシートおよびビジョンシートの記載確認
15	グループ活動⑨（ディスカッションによる学びの振り返り） まとめ

Table 2.　独自性欲求尺度（The Japanese of the Need For Uniqueness Scale, JNU）

因子		独自性欲求尺度の項目	逆転項目
Ⅰ：一般的な意見表明に関する態度	1	知らない人ばかりのグループ中でも，ちゅうちょせず自分の意見を述べる．	
	3	自分の考えが役に立たないかもしれないと思って，実行に移すのをためらうことがある．	●
	15	先輩と意見がくいちがった時に，自分の意見をいわないままにしておくことはあまりない．	
	16	ミーティングなどの集まりで，誤りだと思われるような意見を言っている人がいると，反対意見を述べる．	
	22	人の意見に反対して，いやな人だと思われるより，いつも賛成している方がよい．	●
	24	人がどういう意見を言っていようが、自分の意見は表明する方である．	
	27	グループと一緒にやるとき，けんかなどにならないように，彼らに賛成している．	●
	28	自分より上の人や，経験の深い人の前では，あまり自分の意見を言わない方である．	●
Ⅱ：他人からの批判に対する態度	2	批判されると自尊心を傷つけられる．	●
	9	他人が自分に反対すると，いやな気持ちになる．	●
	17	人が大勢いる中で「違和感」を感じると，いやな気持ちになる．	●
Ⅲ：所属集団からの心理的自由	7	制服やユニフォームを着るのが好きだ，それは，制服ユニフォームをきていると，そのメンバーであることにプライドを感じるからである．	
	10	社会の規則や基準についても従わなければならないわけではないと思う．	
	12	仕事で成功すると言うことは，他人ができなかったような貢献をすることであると思う．	
Ⅳ：反対意見など抵抗のある場合の意見表明に関する態度	5	人に説得されて，意見や決心を変えることがしばしばある．	●
	11	そうすることが望ましくない結果を招きそうなときは，自分の考えていることを口にだすことができない．	●
	25	反対意見に対して，自分の意見を強く弁護することが多い．	
	26	我を通すことはあまり好まない．	●
	30	集団活動に参加するとき，どちらかといえば，集団に同調しない方である．	
Ⅴ：進取の気風	18	どうせ死ななければならないのなら，畳の上での平凡な死よりも，非凡な死に方の方がよい．	
	19	人から「変わり者」と言われるよりは，皆と同じようにしている方が良い．	●
	21	いつも信頼できる方法だけを用いる人間だと思われるよりも，むしろ，いつも新しいアイデアを試みる人間だと，人に思われたい．	
	23	あまり変わったことを人に言うのは好きではない．	●
	31	人生のいろいろなことで、賭をやるよりも，むしろ，安全主義である．	●
Ⅵ:攻撃的な自己主張	6	教師や法律家や「教養人」の威厳を傷つけて愉快に感じることがたまにある．	
	8	人から「生意気だ」とか「うぬぼれている」とか言われたことがある．	
Ⅶ：規則に対する態度	14	いつも規則を守ろうとする．	●
	20	厳しい規則や，きまりの下で働くのは得意でない．	
	29	今まであまり家の規則に縛られて来なかった．	
	32	非人間的な社会にいつも従っているよりも，たまには規則を破る方がよい，と思う．	
Ⅷ：社会慣習に対する態度	4	社会は，新しい習慣も道理的に取り入れ，古い習慣や異なる伝統にすぎないものは捨てるべきだと思う．	
	13	人に，私が社会の習慣や伝統を軽視する人間だ，と思われるのはいやだ．	

4学年・127人の合計169人を対象とした．

2．データ収集方法

1年生には，看護総合演習Ⅰの履修前後に，無記名自記式質問紙調査を実施した．調査用紙には，パスワード記載欄を設け，履修前後の個人データが一致するように，同一のパスワードの記述を指示した．2～4年生には，学年ごとの授業時間外に無記名自記式質問紙調査を実施した．質問紙は，留置式にて回収した．

3．調査内容

履修前の1年生および2～4年生の調査内容は，学生の主体性の一側面を測定できる独自性欲求尺度（The Japanese version of the Need For Uniqueness Scale）（以下, JNU）（Cronbach's α 係数0.795）[6] および対象者の基本属性である．JNUは，因子Ⅰから因子Ⅷまでの下位尺度より構成されている（Table 2）．履修後は，1年生のみを対象とし，履修前の調査内容に加え，本演習の学習目標（Specific Behavioral, Objectives）（以下, SBO）（Table 3）を用い，SBOの達成状況を調査した．その際，SBOは，1：全然あてはまらない，2：あまりあてはまらない，3：だいたいあてはまる，4：非常にあてはまる，の4件法で行った．

4．調査期間

1年生の調査時期は，履修前は平成24年4月，履修後は同年7月であり，2～4年生調査時期は，平成24年4月であった．

5．分析方法

分析は，JNUのリッカート尺度を点数化し，各因子の得点および総得点を算出した．学生の主体的学習態度を方向づける独自性欲求の特徴を学年間比較により明らかにするため，JNUは1年生の履修前データを採用し，学年ごとに一元配置分散分析を行った．さらに，多重比較（Bonferroni法）を行った．この際，1年生，2～4年生共に，4月に調査したデータを用いて分析を行った．さらに，1年生では，演習の効果を検討するために，履修前後のJNUの各因子得点および総得点について対応のあるt検定を行った．また，SBOは各項目のリッカート尺度を点数化し，SBO達成得点を算出し，記述統計を用いた．加えて，JNU得点とSBO達成得点との関連を調べるため，Peasonの相関係数を求めた．

分析には，IBM SPSS 21.0J for Windows（IBM, Somers, NY）を用いた．

6．倫理的配慮

本研究は，看護研究における倫理指針を遵守した．とくに，研究参加の可否の判断に，教員としてのパワーが働かないように，(1) 研究の参加は，個人の自由意思であること，(2) 研究に参加しないことで個人的に不利益を被ることはないこと，(3) 研究への参加の有無が成績に反映されないこと (4) 研究に参加しても，学生には直接的な利益はないこと，を口頭と書面で説明し，参加同意の得られた者にのみ，質問紙に回答し，一定期間以内に所定場所に提出してもらった．また，本研究は所属大学倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号：24-020）．なお，本研究における利益

Table 3.　看護総合演習Ⅰの学習目標（Specific Behavioral. Objectives, SBO）

1	看護を学ぶ者としての将来像や関心のありかを説明できた．
2	1を深めるために、適切な情報を集めることができた．
3	情報を整理，統合し，説明することができた．
4	収集した情報を基に，取り組む課題を設定できた．
5	課題に取り組むための行動計画をたてることができた．
6	行動計画に基づいて，自己の立場で選択し，考え，感じ，行動することができた．
7	自らの体験を振り返り，その内容を表現することができた．
8	演習を通して，自分の変化（成長）を感じることができた．
9	他者の学びを知ることで，学び方や学ぶ内容の多様性に気づき，認めることができた．
10	グループメンバーとして主体的に課題に取り組み，グループに貢献することができた．
11	演習での学びを活用しながら，自分の将来像（ビジョン）を描く事ができた．
12	ビジョンを実現するためのゴールを設定できた．

相反はない．

Ⅳ．結　　果

1．独自性欲求尺度得点の学年比較（Fig. 2）

質問紙の回収は，1年生の履修前42人（回収率100％），履修後40人（回収率95.2％），2年生40人（回収率100％），3年生36人（回収率94.7％），4年生40人（回収率100％）であり，すべてを分析対象とした．学年比較でのJNUの総得点の平均値は，2年生がもっとも高く73.54点で1年生がもっとも低く70.39点であった．総得点の比較では，学年間に有意な差は認められなかった．因子別による比較では，「因子Ⅱ：他人からの批判に対する態度」では1年生は3年生より，「因子Ⅶ：規則に対する態度」では4年生は1年生より，「因子Ⅷ：社会習慣に対する態度」では3年生および4年生は1年生より有意に高かった（P＝0.026，P＝0.029，P＝0.016）．

2．履修前後のJNU得点の変化（Fig. 3）

1年生において，履修前後のパスワードが一致した学生は，29人（一致率69.4％）であり，パスワードが一致した学生のみ分析対象とした．JNUの総得点は，履修前が70.19点であったのに対し，履修後は74.69点と統計的に有意に高くなっていた（P＝0.003）．さらに，「因子Ⅲ：所属集団からの心理的自由」の得点が，履修前は5.07点，履修後は7.72点であり，統計的に有意に高くなっていた（P＝0.000）．また，「因子Ⅴ：進取の気風」についても，履修前は11.21点であったのに対し，履修後は12.17点となっており，統計的に有意に高くなっていた（P＝0.018）．

3．SBOの達成状況（Fig. 4）

履修後40人（回収率95.2％）を分析対象とし，SBOの達成状況を確認した．SBO達成状況は，「項目9：他者の学びを知ることで，学び方や学ぶ内容の多様性に気づき，認めることができた．」がもっとも高く3.45点であった．ついで，「項目6：行動計画に基づいて，自己の立場で選択し，考え，感じ，行動することができた．」が3.20点，「項目11：演習での学びを活用しながら，自分の将来像（ビジョン）を描く事ができた．」が3.20点であっ

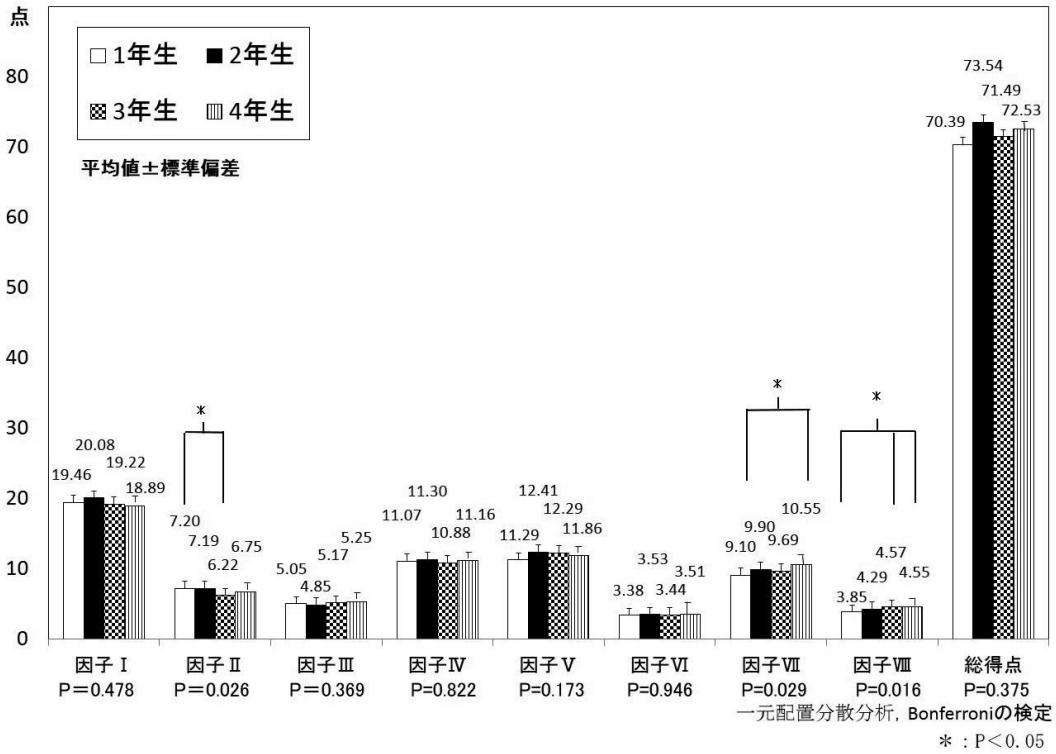

Fig. 2.　学年別のJNU得点

た．もっとも低い項目は，「項目5：課題に取り組むための行動計画を立てることができた．」であり，2.98点であった．ついで，JNU得点とSBOの達成状況得点との関連を調べるために，Peasonの相関係数を求めたが，統計的に有意となる結果は得られなかった．

V．考　　察

1．独自性欲求の特徴から考える教育のあり方

JNU得点の学年比較より，1年生は「因子Ⅱ：他人からの批判に対する態度」に関する得点が統

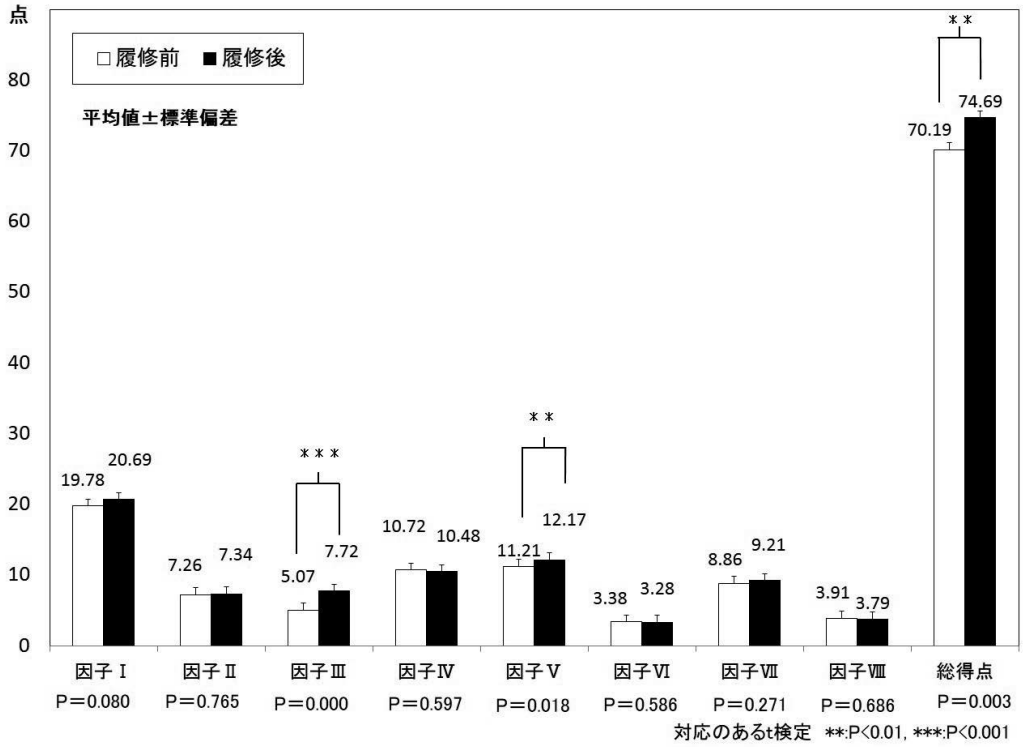

Fig. 3.　1年生の履修前後のJNU得点（N=29人）

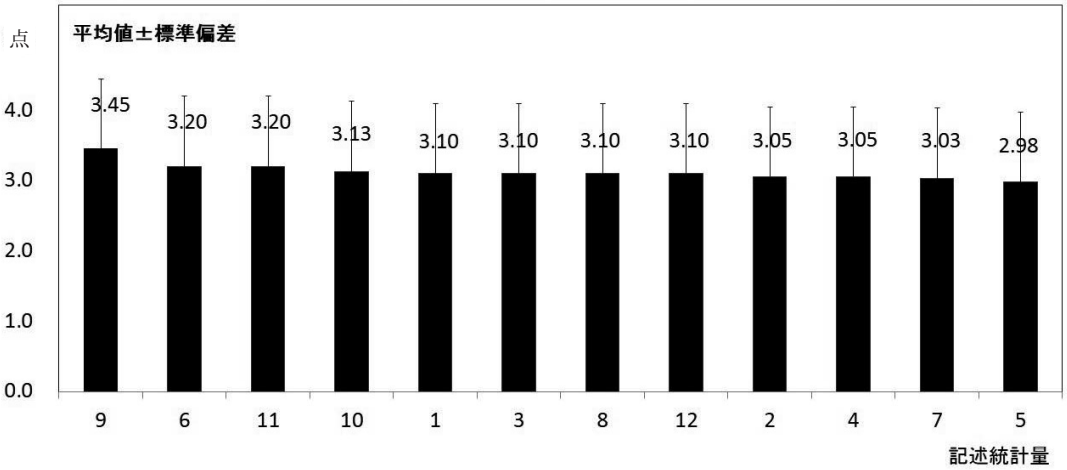

Fig. 4.　1年生の履修後のSBO得点（N=40人）

計的に有意に高かった．この結果より推察される1年生の独自性欲求の特徴は，他人からの批判に耐えることができる，他者と違っていても自身を肯定できる等，他者からの批判や個別化において独自性が高いことが考えられた．さらに，「因子Ⅶ：規則に対する態度」，「因子Ⅷ：社会習慣に対する態度」に関する得点が有意に低かったことから，入学直後の学生よりも在学期間が経過した学生の方が既存の規則や社会の慣習に従うことにあまり肯定的でなく，これらに縛られたり従ったりしたくない傾向にあると考えられた．

先行研究において，看護学生を対象としたJNUの最新の結果は，1998年に公立の看護大学で実施された結果[5]であり，このデータと比較すると，各学年共に各因子の平均得点は本研究において低い傾向にあった．しかしながら，先行研究は，15年前の調査結果であり，看護系大学の数の急増や大学全入時代の到来[6]等，大学の様相も著しく変化しているため，単純な比較検討は困難であると考えられた．また，学年間比較は，横断調査のため，因果関係においては，言及できない．

学年比較による1年生の独自性欲求の特徴より，効果的な教育プログラムとして考えられることは，学生が自らの考えを自由に述べ，他者を尊重しながら討議できる機会の設定および，授業に臨む態度や履修単位の管理等，既存の規則に主体的に即することで，自らの学習環境を整える力を促すことが必要であると考えられる．そのため，教員は，学生が自己の学習態度や成績をリフレクションできる機会の設定や履修内容の自己管理を促す働きかけが必要であると考えられる．このように，教員が，演習開始前に学年の特徴を適切に捉え，効果的な教育プログラムを学生に提供することは，より学生の主体的な学びに繋がると考えられる．

2．ポートフォリオを用いた学習による変化から考える教育のあり方

「因子Ⅲ：所属集団からの心理的自由」の得点が，履修前よりも履修後に，高くなっていた結果より，社会貢献しようという意識の変容に繋がっていたことが推察される．また，「因子Ⅴ：進取の気風」の結果より，自ら進んで事をなすという主体性に関する得点が高くなっており，自分の意思によって判断・行動する態度が修得できていることが推測される．さらに，独自性欲求総得点が高くなっていた結果より，他者とは異なる自分を意識し自己認識を明確に持つ力が備わったことが考えられ，周囲に流されることなく自身の意思で進むことができるようになったことが推察できた．

加えて，SBO達成状況の結果より，「項目9：他者の学びを知ることで，学び方や学ぶ内容の多様性に気づき，認めることができた．」，「項目6：行動計画に基づいて，自己の立場で選択し，考え，感じ，行動することができた．」，「項目11：演習での学びを活用しながら，自分の将来像（ビジョン）を描く事ができた．」等の項目の得点が高かったことより，加藤ら[7]が述べているように，ポートフォリオを活用することで，学生は自らの意思をもって学習することができていた．また，SBOに掲げた12項目中11項目が3.0点以上であり，本演習の目標はおおむね達成できたと考えられ，目標に即した学習効果が得られていたことが示唆された．これらの結果より，本演習のプログラムを継続していくことは有効であると考えられる．

さらに，学生が主体的に取り組めるように，学生個人の意見が尊重されるグループワーク活動への改善が必要であると考えられる．とくにグループ活動や自己学習方法に関するリフレクション，活動の方向性の示唆等，グループを担当する教員のファシリテーションの影響が大きいと推察される．そのため，学生の特徴や科目の目的を共有することに加え，グループワークの際の教員のファシリテーション技術やコーチング技術等，教員の教育技術の向上に向けた研修等の取り組みが必要である．

3．主体的学習態度に関する教育評価の方法

本研究は，JNUおよびSBO項目を用いて，学生の主体的学習態度を分析した．看護総合演習Ⅰを履修した1年生は，履修前よりJNU総得点が高くなっていたため，主体的に学習できたことが推測されたが，JNUの結果のみで学習効果を評価するには限界がある．さらに，現代の学士課程の学生の特徴として，目的意識の希薄化，学習意欲の低下[8]等，の問題が挙げられ，資格取得に係る教育であっても，バランスのとれた教育活動を行う必要性および学生の主体的活動の充実に向けた支

援に努める必要性[9]が提唱されている．加えて，看護の臨床現場では，その場その場で即座の判断が求められるため，質の高い効果的な看護援助を行うためには，常に主体的に学習し，問題解決能力が発揮されなければならない[10]と考える．看護職として必要とされる主体的学習態度は，医療の高度化や急激な少子高齢化等，社会環境の変化に伴い多岐に渡り，看護職の倫理綱領[11]にも明記されている重要な事項である．また，ポートフォリオを活用した教育評価は，模索されている現状があり[7]，浅田[12]，唐澤ら[13]，安川[14]は，客観的な評価基準の設定，ポートフォリオ評価の発展のための研究と実践の積み重ねの必要性があると述べている．本学科においても，評価基準を明確にし，単年度の評価に止まらない取り組みを行う必要があると考えられる．そのため，今後は本学科が目指す主体的学習態度の獲得とは何かを改めて明確にし，評価尺度を吟味することや学生のレポートを質的に分析すること等，多面的な評価を行う必要があると考えられる．

Ⅵ．研究の限界

本研究は，JNUおよびSBO項目を用いて，学生の主体的学習態度を分析した．しかしながら，看護職として必要とされている主体的学習態度は広義であるため，これらの結果のみで学習効果を評価するには限界があり，本学科の学生が必要とする主体的学習態度の要件を含め，さらに検証を行う必要がある．また，平成24年度よりポートフォリオの活用を系統立てて，4年間のカリキュラムに組み込んだ．本研究は，初年度の一年生のみの分析であったため，今後も経過を追って，学生の変化を評価していくことで，より良い教育方法の改善に繋がるであろう．

Ⅶ．結　　語

本稿は，ポートフォリオを用いた看護総合演習Ⅰの学習効果を明らかにし，学生が主体的学習態度を獲得するための教育のあり方を検討することを目標とした．本稿のまとめとして，以下の4点が挙げられる．

1．1年生の履修前後のJNUの変化より，グループワークを通して，他者とは異なる自分を意識することができ，さらに，ポートフォリオを活用することによって，学生は意思ある主体的な学びを行っていたことが推察できた．

2．SBOの達成状況より，演習の目標に即した学習効果が得られており，現行のプログラムを継続することが望ましい．

3．教員は，学生が意見表明を行う機会の設定や学習環境を整えられる仕組み作りを行う必要があり，さらに教員の教育技術向上に向けた研修等の取り組みが必要である．

4．教育のあり方を検討するためには，JNUおよびSBO項目だけではなく，本学科の学生が必要とする主体的学習態度の要件の検討を含め，多面的な教育評価を行う必要がある．

快く研究に参加してくれた学生と看護総合演習に関わる教員に深く感謝いたします．本研究は，平成24年度東京慈恵会医科大学看護学科研究費の助成を受け実施した．

著者の利益相反（conflict of interest：COI）開示：
本論文の研究内容に関連して特に申告なし

文　　献

1) 鈴木敏江. 総合的な学習プロジェクト学習ポートフォリオ解説書. 東京: 教育同人社; 2003. p. 1-36.
2) 鈴木敏江．ポートフォリオ評価とコーチング手法. 東京: 医学書院; 2006. p. 1-143.
3) 井上史子, 沖裕貴, 林徳治. 中学校における自主性尺度項目作成の試み. 学習情報研究. 2005; 1: 37-40.
4) 浅海健一郎. 子どもの「主体性尺度」作成の試み. 人間性心理学研究. 1999; 7: 154-63.
5) 永嶋由理子, 野口多恵子. 看護学生の主体性と達成欲求の実態. 山口県大看紀. 1999; 3: 53-9.
6) 文部科学省[internet]. 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会・最終報告書. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf.[accessed 2014-01-10].
7) 加藤真紀, 吾郷ゆかり, 吾郷美奈恵, 灘久代, 山下一也. 看護教育におけるポートフォリオ活用の文献展望. 島根県看短大紀. 2005; 11: 99-107.
8) 文部科学省[internet]. 中央教育審議会大学分科会報告書. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/

chukyo4/. [accessed 2014-01-10]
9) 澁谷貞子. ラベルを活用したポートフォリオ評価の効果について―主体的な学習態度を養う―. 医療保健学研究. 2010; 1: 117-26.
10) 大平光子, 井端美奈子, 田浦美智子, 古山美穂, 工藤里香, 森川香織 ほか. 主体的学習態度をはぐくむ教育方法―助産学演習における少人数グループワークの試み―. 大阪看大紀. 2005; 11: 23-9.
11) 日本看護協会[internet]. 看護者の倫理綱領.http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/pdf/rinri.pdf. [accessed 2014-01-10]
12) 浅田豊.「新しい学習観」に立つ日本の学校教育におけるポートフォリオ学習の可能性と意義. Qual Nurs. 2000; 6: 238-40.
13) 唐澤由美子, 正木治恵, 井上智子, 亀井智子, 北山三津子, 高山早苗 ほか. 達成事項を記録したポートフォリオ評価. Qual Nurs. 2003; 9: 516-23.
14) 安川仁子. ポートフォリオ評価に対する学生の認識と教育的意味　ポートフォリオの内容分析を通して. 日看教会誌. 2004; 14: 228.